

死の看護にめざめる

河内登美子

桃山市民病院(大阪市)

友人の岡野真規代さんから突然、「りれー随筆」の原稿依頼がありました。文章を書くことが大の苦手な私ですが、意を決してお引き受けしました。前号の岡野さんとは助産婦学院の先輩、後輩の間柄で職場も同じだったことがあります。岡野さんは大変な勉強家でしたので、私はいつも彼女からお尻をたたかれていた頼りない先輩でありました。いまでは年に数回電話でお話しをする程度ですが、いつも彼女からは素敵な輝きを感じています。それは先月号に書かれていたように、仕事へのひたむきな姿勢と素敵なお主人のせいなのでしょう。

内科病棟に勤務して

私は17年間産科病棟一筋でしたが、2年前に突然内科病棟への異動がありました。助産婦の仕事が大好きで助産婦資格を取ったのに、突然の内科病棟への異動は私をまっ暗にしていました。一晩中泣き明かし、涙が止まらなかったのが思い出されます。この病院をやめた、なぜ私は助産婦になったのかなどと、自問自答を繰り返したものです。いま思えば恥ずかしいかぎりです。

何はともあれ、その内科病棟勤務が始まりました。勤務して1か月もたたないうちに、5人の患者さんの死に出会いました。助産婦歴は長いのですが、臨終の場面に立ち会うのは初めての経験でした。これまでは人間の誕生を喜ぶ立場にいた者が、今度は人間の最後の死を看とるという立場に変わり、まことに複雑な思いが私

を苦しめました。生と死は、いつの世も人生につきることのない哲学的問題でもあります。人間の寿命は永遠ではなく、死はまぬがれません。考えさせられることの多い、人間の最後の場面を看ることのできる職場にいることを、今は感謝できるようになりました。

人間の誕生は素直に「おめでとうございませう」といえるのですが、ターミナル患者に接したとき、はたしてどんな言葉を選ばよいか、大変神経を使います。病室のベッドの上でボンヤリと窓の外を眺めている患者の姿、呼吸困難の中で握りしめてくる弱々しい手に込められている患者の苦しみ、不安や恐怖。そんな患者を前にして私に一体何ができるのだろうか。医療に何ができるのでしょうか。人間として最後の場面にある人の心を知るよしもなく、私は無力感を覚えました。

ターミナル患者の入院中、家族が患者に付き添ったり、ともに過ごす時間は多く、家族が最後の看護に立つ機会があります。これらの人々から多くのことを学ぶことができました。この世に生まれるお手伝いをしてきた私ですが、人生の最後を看することはそれ以上に素晴らしいことであると感じています。患者をやさしくつつみ、援助しているとき、本当にこの病棟で勤務できてよかったと感じるとき、2年前に比べて、充実した日々であることを確認できます。

看護とは、患者と看護婦の目に見えぬ交流ではないでしょうか、したがって、看護者が患者をどう観察し認識するかによって、看護の内



容、行為も違ってくると思います。私も看護婦として、患者の思い、要求、状況をできるだけ共感できるようになりたいと思っています。

ある医師のことは

ある医師が「助産婦は助産婦である前に看護婦であることを忘れてはいないか」と常々言っていたことを思い出しました。いま産科病棟を離れて、内科看護をしていく中で、この言葉には重みがあります。

助産婦は医師の行為の一部である「助産」という行為を独占しています。看護を職業とする者として共通にもっている基本を忘れてはいないか、いま徹しくふり返る必要があります。「助産」という業務を独占し、医師とはりあい、「助産」というものを高みに置いてはいないでしょうか。いままで妊産婦、家族の心に寄りそっていたのでしょうか。もっと視野の広い看護を展開する必要があるのではないだろうか、また専門職といわれるにふさわしい人間としての豊かさに欠けていたのではないのかと、大変反省しています。今後はこの経験を大いにいかしていきたいものです。

助産婦も機会があれば、一般病棟での勤務を経験してもらいたいと思います。どこで仕事をしていても、私の仕事は「助産婦」だと思っています。

母と子のきずなの深さに

1か月前のこと。出産直後に胃癌が発見さ

れ、赤ちゃんを産科病棟に残したまま内科病棟に送られてきた23歳の褥婦さん。妊娠中は後期に少し切迫早産徴候がありましたが、順調に経過し、無事出産しました。分娩後、胃に大きな「しこり」がみつかり、その時点では治療の効果は期待できない状態でした。その褥婦は授乳することができなくなり終始ベッドに横たわり、痛みと赤ちゃんの心配を訴えていました。その後彼女は衰弱し、言葉も出なくなりました。しかし、出産したわが子のことを心配し、字にならない字で筆談をしました。願いがかなって、亡くなられる8時間前に赤ちゃんとも面会することができたときには、もうすでに意識不明の重篤な状態でした。それでも赤ちゃんの泣き声が聞こえるたびに、母親のハートレイトは120台だったのが140台に一瞬上昇し反応しました。最後の最後まで母親のとしての責任、母と子のつながり、母親の愛の偉大さを私に教えてくれました。

どうか赤ちゃん、すこやかに成長を。そして安らかに眠れ、偉大なる母親。ここでもまた涙でした。

“母の情 吾子残して 露と消ゆ”

* * *

今回は私の助産婦学院の恩師であります佐々木信子婦長にお願いします。婦長さんのお父さまは93歳とご高齢でいらっしゃいますが、年を感じさせない魅力的な紳士です。お父さまのことも少しお話してくださればうれしく思います。それでは次号よろしくお願い致します。